としょかんNEWS 第105号

2015年12月4日
湘北短期大学図書館

冬休みの読書を応援するお楽しみ企画！！

冬季休暇中の特別貸出を下記のとおり実施いたします。

- 期間 ： 12月14日(月)～1月14日(木)
- 冊数 ： 10冊まで

昨年に引き続き、特別貸出の開始に合わせて、みなさんの冬休みの読書を応援するお楽しみ企画を実施します！年末年始にゆっくり読書をしてみてはいかがでしょうか？

● 第一弾！福引きキャンペーン

お楽しみ企画第一弾として、「福引きキャンペーン」を実施します。冬休みの特別貸出で本を借りた方全員に福引きのチャンス！おしゃれグッズ、図書館キャラクター「さるーち」グッズなどの賞品をご用意して、みなさんをお待ちしています。

抽選会場は、レファレンスカウンターです。賞品の数には限りがありますので、お早めにご参加ください。

- 期間 ： 12月14日(月)～12月22日(火)

● 第二弾！お年玉キャンペーン

お楽しみ企画第二弾として、「お年玉キャンペーン」を実施します。冬休み明けに「読書ノート」を提出した方全員に図書館オリジナル2016 年の卓上カレンダーをプレゼント！季節の「さるーち」イラスト入り。このカレンダーがあれば、図書館の開館スケジュールも一目瞭然。まだ読書ノートをつけたことがない方も、しばらく読書ノートをつけていなかった方も、是非この機会に参加してみませんか？

- 期間 ： 1月5日(火)～1月14日(木)

「読書ノート」をつけていけば、自分が学生時代にどんな本を読んだか、その本から何を学んだか、どんなところに感動したか、振り返ることができます。また、レポートやゼミの参考文献リストとして活用しても便利！就職活動の際にエントリーシートや面接で自己 PR するときにも役立ちます。ぜひチャレンジしてみてください。
図書館に寄せられた読書ノートの中から優秀作品を決める「読書ノート大賞」は2月号で発表予定です。

【連載】リレーエッセイ(25) 自転車ロードレースの楽しみ方　　情報メディア学科長　内海 太祐

自転車ロードレースを見るのが好きだ。「派手でピチピチのレーサースーツを着てただ自転車で走るだけの人たちを何時間も眺めるのは、どう考えても変だ。」という妻の言葉をよそに、7 月の夜、私はツール・ド・フランスのチャンネル権だけは譲らない。ツール・ド・フランスは世界最大の自転車ロードレースである。主にフランス国内を21 日で3500km ほど走る。一日の選手の消費カロリーは 8000kcal とフルマラソンの 3 倍程度、1000m 級の山岳が何度も現れ、人間の体力の限界に挑戦するレースといってもよい（山口和幸『ツール・ド・フランス』（講談社、2013 年））。

自転車に乗らない人に自転車競技の面白さを伝えるのは難しい。初めて映像を見ただけでは、レーサーが集団で自転車を漕いでいるだけにしか見えない。そういう人には渡辺航『弱虫ペダル』（秋田書店、『週刊少年チャンピオン』連載中）をお勧めしたい。自転車ロードレースでは空気抵抗との闘いは大きなウェイトを占める。どんなに優秀な選手でもチームの助けなしには絶対に勝てない。山岳と平地では要求される特性が全く違い、選手の個性はレースに大きく影響する。『弱虫ペダル』が読者になじみのないテーマを扱ってヒットしたのは、それらがよく表現されているからだろう。

チームにはエースを勝たせるために尽くすアシストと呼ばれる選手たちがいる。貢献の仕方は風よけであったり補給であったりするが、そのような選手たちに焦点を当てて書かれた近藤史恵『サクリファイス』（新潮社、2007 年）は、ミステリー調でありながらレースの仕組みや選手の役割をリアルに描いている。

チームの重要性を理解すると、選手ごとの個性はさらに魅力的に映る。実力の抜きんでた選手にはあだ名がつけられる場合もある。「穴熊」イノー、「人喰い鬼」メルクス、「太陽王」インデュラインなどである。それらの中でも私が惹かれるのは、「海賊」パンターニである。ツールの山岳の名所「ラルプデュエズ」の最速登坂記録を持つ山岳スペシャリストの生涯は、ベッペ・コンティ『マルコ・パンターニ―海賊（ピラータ）の生と死』（未知谷、2009 年）に詳しい。自転車ファン以外の人にも共感を呼ぶ内容となっている。

【連載】館長閑話(26) アフガニスタンの少数民族　　館長　野口 周一

IS のテロが伝えられるなか「アフガニスタンの首都カブールで 11 日、少数民族ハザラ人が治安改善を求める抗議デモを行った」。同国では「子供を含むハザラ人 7 人が斬首され遺体で見つかる事件があり」、「政府の治安維持能力の低さを批判」、「タリバンとダーイシュ(IS の別称)に死を」と叫んだ（「毎日新聞」11 月 12 日付）。

2001 年 3 月、バーミヤンにある世界遺産の大仏が、偶像破壊を名目にタリバンによって破壊された。三蔵法師として知られる玄奘（げんじょう）もインドへの途次、この地を訪れたと云（い）われる。その後「東京新聞」02 年 1 月 20 日付には「アフガニスタンのバーミヤンで、タリバンに破壊されたのは石仏像だけではない。この地に住んでいた少数民族ハザラ人も迫害され生活基盤を奪われた」とある。

このハザラ人とは何者なのか？岩村忍は京都大学のカラコルム・ヒンズークシ学術探検隊に加わり、1954、55 年とアフガンに調査に赴き、同国に残る 13 世紀モンゴル人の子孫の問題に取り組んだ。「私達がモゴールを探していることはたちまち評判になった。ホテルの召使たちは、モゴールのようなつまらない者を探し求めてはるばるやってきたということは、理解できないほど不思議なことだという。モゴール人はかつて人を殺したり、放火したり、破壊し、荒らしまわった悪い奴らで、今は貧乏な、卑しめられている部族だといっている」と書いた（『アフガニスタン紀行』朝日新聞社、1955 年）。この「破壊し、荒らしまわった」という事実は、何を物語るのか。チンギス＝カンの大征西の際(1219 年)、その本隊はバーミヤンに進攻、町を占領、「人間から野獣にいたるまで殺せ」と命令した（勝藤猛『モンゴルの征西』創元社、1970 年）。また「つまらない者」については、1960 年頃の状況として、同国の「下層階級として生き続けている。しかし彼らの生活は惨めで、指導階級であるパシトン族やその他の民族と、彼らとの間には結婚はほとんど行われず、そのうえ、学校にも行けない。陸軍へ入っても銃はもたせられず、もっぱら雑役に服している」と記録されている（NHK 特別報道班『中近東を行く』日本放送出版協会、1961 年）。即ち、モゴール族はモンゴル語系であり、ハザラ人が用いるダリー語にモンゴル語起源の単語が多いため、モンゴル族の末裔と云われている。

チンギス＝カンのアフガニスタン遠征から派生した民族分布は、現代にまで影響を及ぼしている。ここに 13 世紀から現代に繋がる歴史がある。